

# 子どもの歴史的見方考え方の傾向とその指導

## —— 因果関係を中心として ——

新発田市立外ヶ輪小学校教諭 中 村 直 蔵

### I 研究のねらい

小学校における歴史学習は、子どもの歴史意識の発達を重視し、歴史的な見方考え方を育てていくことがたいせつである。歴史的見方考え方として、事実と事実との関係考察、いわゆる因果関係の把握が極めて重要であるが、この関係は自然科学と比べて非常に複雑である。ひとつの事象を克明に究明すれば、その関連が単純でなく、極めて複雑であり、多面的な要素を多く含む。また直接的な原因の背後には、根本的な深い関連があることに気づく。歴史を動かす力の中には、目に見えぬものが非常にたいせつなはたらきをするものであるが、子どもにこれを理解させることは、なかなかむずかしいことである。

歴史認識は、自然科学的認識における「くりかえし」のきく特徴と異なり、一回性が生命である。子どもが因果関係をどのようにとらえ、歴史の流れにどう位置づけて学習を発展させていくかは、歴史学習を研究する者としての大きな課題であろう。

そこで、小論では、子どもが歴史学習を進めるにあたって、学習前において因果関係の把握の傾向として、なにか共通した問題点はないか、また学習が進むにつれて、因果関係把握の傾向が、深まってきた点、少しも変わらない点はどういうところにあるだろうということに視点をあてて考察を進めることにした。こうした問題に焦点をあて、効果的な学習過程の改善の方途をはかろうとするものである。

### II 研究の方法

#### 1. 研究の手順

- (1) 事前調査、事後調査によって、子どもの関係把握の思考の傾向性を分析する。
- (2) 因果関係把握を深めるための学習指導計画の立案と、授業分析による検討をする。

#### 2. 研究の対象

第6学年1学級 男21名 女25名 計46名

学習成績を、上位群10名、中位群24名、下位群12名の3段階に分けて分析した。

### III 研究の内容

因果関係の思考について次の史実と調査方法で分析をこころみた。

#### 1. 調査問題の視点

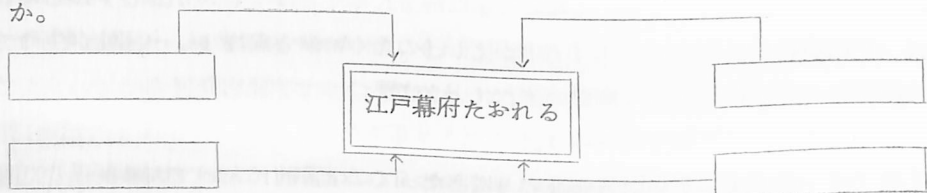
- (ア) 江戸幕府の衰亡

問題Aは、小単元「武士の世の中」の学習終了後、キーワード法によって調査した。できるだけ客観化するためと、キーワードとなることばの意味の理解、因果の関連的思考が深まったかどうかを分析しようとした。問題Bは、キーワードのことばにとらわれず、いろいろな衰亡の原因を4点にしぼってあげさせ、複雑な原因をどれだけ焦点づけて把握できるかを分析した。

問題A 江戸幕府には、いろいろの力がはたらいて幕府はたおれました。次のことばを使って江戸幕府は、なぜ衰えてついには滅んでしまったのかを書いてください。

江戸幕府 いっき ベリー 井伊直弼 関税 開国 尊王論  
攘夷論 徳川慶喜 薩摩藩 長州藩 260年

問題B 江戸幕府が、たおれた原因を4つにしぼれば、次の□の中へどんなことがらを書きますか。



#### (1) 自由民権運動

学習前と後に、自由民権運動の原因と結果を6つの選択肢によって調査した。もうひとつは、学習後自由民権運動の原因を自由記述で書いてもらった。キーワード法との比較検討も試みようとした。

#### 2. 思考の傾向性を分析する視点

- A 一面的で、しかも観念的な把握の傾向
- B 一面的であるが、具体的な把握の傾向
- C 多面的であるが、観念的な把握の傾向
- D 多面的で、しかも具体的な把握の傾向

・観念的とは、考え方が常識的で、大ざっぱな傾向をさし、

・具体的とは、考え方が例証的で、わかりやすく望ましい傾向をさす。

### Ⅳ 研究の結果とその考察

#### 1. 江戸幕府の衰亡について

キーワード法による記述のため事象を多面的に把握することができたが、各事象の意味を理解し、関連的、総合的な理解の上にたつての思考力の深まりや、歴史の流れに位置づけて考える子どもが50%程度であるということは、中・下位群が、望ましくないCのタイプに多くの反応を示していることに原因しているからである。

傾向	江戸幕府			自由民権運動		
	上	中	下	上	中	下
A	0	1	4	0	2	4
B	0	0	0	2	10	3
C	2	11	7	1	4	3
D	8	13	1	9	8	2

中位群のⅠ児は「江戸幕府は、大ききんで農民が困っていても税を下げなかったので、いっきをおこした。それで幕府がおとろえているところへ、ベリーがきた。そして尊王論、攘夷論をおしきって、井伊直弼が開国した。そのないようは、関税、さいばんけんなど日本にふりなことがあった。そして、薩摩藩、長州藩などの運動によって260年徳川慶喜は天皇に力をゆずった。」と書いている。子どもが歴史事象を理解するとき、事象と事象とを関係づけ、さらに次の事象との関係をとおして、全体の流れをつかむということはむずかしいといわれている。Ⅰ児の場合は、2・3の事象の関連づけはなされているが、その他の事象が関連づけられておらず、全体として脈絡がすっきりしてない。

江戸幕府と一揆、ベリーと開国、薩・長の倒幕運動と大政奉還というように、断片的な羅列に終始し「そして」「そして」とつないでいく認識のしかたをしている者が多くみられるのは、ひとつの共通した認識のしかたと言えよう。

しかし全体と部分との関係をおさえ、時代の流れに位置づけて認識している上位群のK児は、「幕府が財政の面などからもおとろえてきたと同時に、他方では百姓が一揆をおこし、中央でもうちこわしなどが行なわれ、世の中は非常に乱れた。その時、ベリーが浦賀に来航し、後にハリスが来たので、幕府は大混乱となった。が、時の大老井伊直弼のはからいによって、通商条約が結ばれた。けれどもこの条約は関税の率の自由や、裁判権が日本にないため、とても不利なものとなった。それをきかいて、尊王論や攘夷論などが高まり、幕府はそれらの人々を次々ととらえたが、ますます広まるばかりだった。それをみた薩摩藩と長州藩は倒幕のくわだてをはじめたため、15代將軍慶喜は1867年、土佐藩のすめによって政権を天皇にお返しした。そして260年続いた江戸幕府は終わった」と記している。

この事例は、事象の確実な把握と一貫性をもった脈絡で認識しているし、混乱期の幕末のイメージを描いている。

＜表2＞ 問題B

幕府衰亡の原因	上	中	下
・ 百姓一揆	10	23	8
・ 尊王・攘夷論	7	9	0
・ 開国	9	23	11
・ 国学の影響	5	9	5
・ 商人の胎頭	3	5	4
・ 諸改革の失敗	1	2	0
・ 幕府の財政窮乏	1	3	2
・ 薩長の倒幕運動	1	7	1
・ 無 答	1	15	18
・ 計	40	96	48

因果関係は複雑で、間接的で目に見えぬところにたいせつな要因があることが多いので、その把握が困難な場合がしばしばある。

しかし＜表2＞で示すとおり、複雑な間接的な原因を多面的にとらえている。これは幕府衰亡の事象を時代の流れに位置づけ、認識の構造が点から線構造になり、しかも定着していると考えられる。特に、中・下位群の子どもが、4つの原因を多面的に、しかも具体的にとらえていることは注目に値する。

幕末の社会、経済、文化等が複雑にからみ合っているなかで、最も決定的だと思われる衰亡の要因を多面的に、しかも具体的にとらえ得たのは、因果関係の把握が、小学生に理解困難であるといちがいに言い切れない面があるように思う。

## 2. 自由民権運動の「結果」の把握について

自由民権運動の因果関係をとらえる学習を、次のように展開した。結果（憲法・議会）→原因の追求→過程（運動の展開）→結果

結果を学習して原因を追求し、過程を学習して再び結果を学習したあとの認識は次のようなものである。下位群のM児は、「議会が開かれたことは、日本も外国におとらない国になってきた。今までにない大きな進歩」と書き、中位群のK児は、「明治時代になって士族は特別の権利を失い、不満であった。そして武力で政府をやっつけようとしたがだめで、今度は言論でやっつけようとして自由民権運動をはじめた。そしてついに議会を開いた。これは明治の日本にとっては、とても大きな進歩であった。」とその意義を高く評価している。史実の結果をただ原因、過程のあとにくる「終わったもの」としてのうけとめ方でなく、結果は次の歴史事象へつながり、また因果関係を生起させていくものとし、発展的な把握のしかたをするように指導していく必要がある。かかる観点から、子どもは結果を歴史の流れに位置づけている点が注目される。〈表1〉では、最も理想的なDと、望ましいBのタイプに集中している。このことは学習が進むにつれて、歴史の流れに位置づけようとする子どもと、視点をバラバラにとらえる子どもが減少して、一面的でも、具体的に、ていねいに述べようとする子どもが増加してきていることを示していると言えよう。

### 3. 因果関係の思考の総合的考察

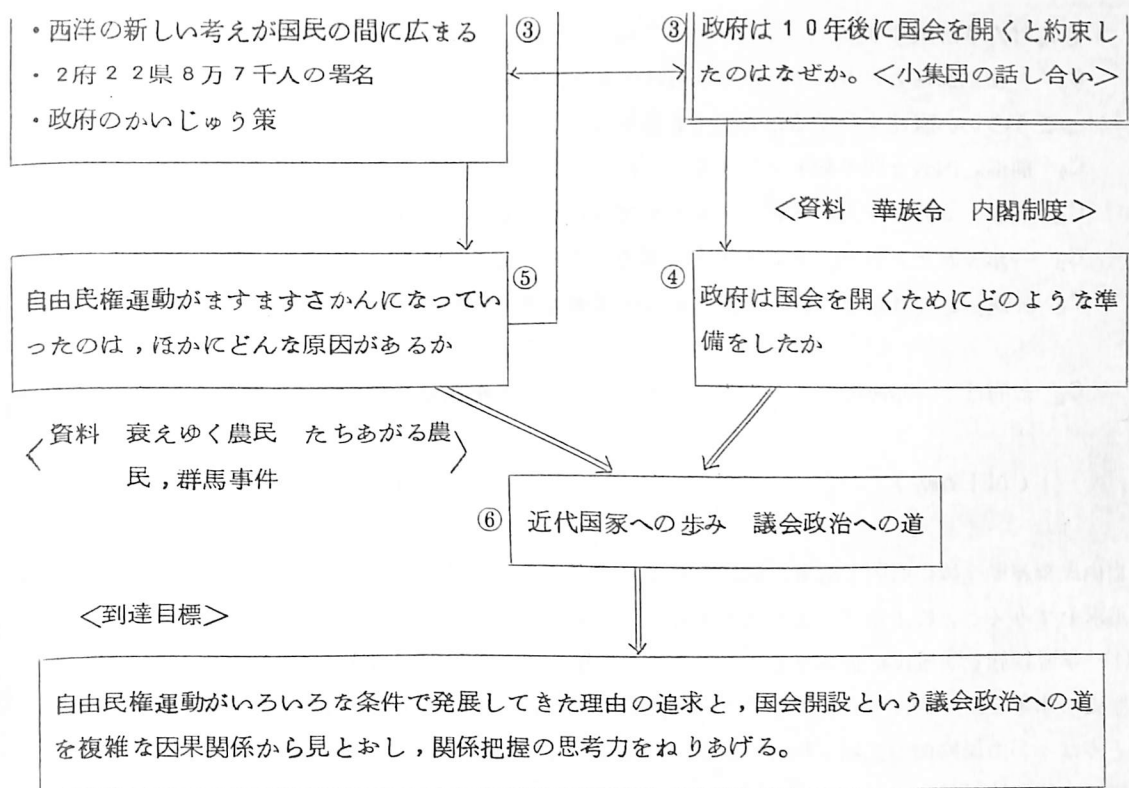
歴史の流れに位置づけて把握する傾向が、学習が進むにつれて増加し、しかも述べ方が深く、実証的に理解するようになってきた。一面的であっても、事象を具体的に、すじのとおり述べる傾向は特に重視してよいことである。上位群は、ほとんど理想的な型で一定しているが、中・下位群は、述べ方が大ざっぱで、常識的で、観念的な思考の型が多くみられるけれども、学習の進むにつれて、理想的な型に近づきつつあることは〈表1〉が示している。しかし、史実の理解があいまいで、いつも独断的主観的な思考傾向の子どもが数名いることも見のがせない事実である。

歴史学習の中でたいせつな、因果関係の思考力を深めるには、前の事象と、後の事象との変化の状態を認識し、2つの事象の関係を見つけ出すことから出発し、複雑多岐な事象を整理し、変化の構造図を洗い出し、因果関係をありありと見出す学習が重要である。因果関係の思考は、あくまでも、授業過程の構造化のなかで把握されなければならないであろう。

## V 結果に基づく授業の実践例

### 1. 自由民権運動の過程から、結果を究明する授業過程の構造図（第3校時）





## 2. 授業の実際

上記の授業過程の中から、客観的な史実と、主観的な予想を比べ因果関係の思考をねる中心的部分を記して分析を試みた。

学習課程を確認し、議会を開けという要求に対して、政府はますます言論や集会を圧迫したという資料の解釈から、子どもは、「政府は強いなあ」「ひどいことをするなあ」「かってだなあ」という政府への怒りにもたれた感情と、明治維新の政府がとった強硬な態度を認識している。

T<sub>1</sub> こんなにひどく新聞などを圧迫したんだから、新聞は政府を批判したことをたくさん書いたんだね。……C<sub>1</sub> そうです。……C<sub>2</sub> 圧迫されても罰せられても新聞はまけなかったのかな。

T<sub>2</sub> そう。新聞は、ぞくぞくと生まれ、政府を攻撃しました。

C<sub>3</sub> 今の時代とちがうなあ。……C<sub>4</sub> 今は政府を批判しても新聞は罰せられません。

C<sub>5</sub> 政府は強い力をもっていたんですね。

T<sub>3</sub> この強い力をもっていた政府が、明治14年に「10年後に国会を開く」と約束しました。さてどうしてだろう。

C<sub>6</sub> 自由民権運動のはげしい力におされたからです。

C<sub>7</sub> 苦しめられている農民のことも考えたからです。

T<sub>4</sub> 〈資料、植木枝盛の『民権自由論』、2府22県8万7千人の署名〉を見て考えてごらん。グループで話し合ってください。(意欲的に資料を見、しんけんに話し合う。)

T<sub>5</sub> 政府は、一步前進したのか。それとも後退したのか。(この発問によって、更に意欲的になり、



しんけんさが増す)

C<sub>8</sub> 一步前進だと思う。それは、政府は大きな力をにぎっているから、約束してもいくらでも、つごうのいい憲法をつくることができるから。

C<sub>9</sub> 前進。国会を開く約束をしても、これから自由民権運動をとりしめることができるから。

C<sub>10</sub> 前進。8万7千人の署名をガンとしてうけつけなかったほど強かったから。

C<sub>11</sub> 一步後退だと思う。8万7千人の署名の力におされたから。

C<sub>12</sub> 後退。この運動をこれ以上かまわないでよくと、政府にとってひどいことになると思ったから。

C<sub>13</sub> 政府は、一步後退したかたちで約束をし、自由民権運動の力を弱めようとした。政府の手です。

(以下省略)

自由民権運動全体の原因、結果の認識を明確にさせるためには、運動の過程における史実の因果関係を追求してみることによって、より深まるものと考えた。

(1) 学習課題を明確に把握させることにより因果関係の思考は深められる。

歴史の事象を断片的にとらえるのではなく、歴史の流れに位置づけてこそ、因果の関連が深められる。子どもは、自由民権側の立場、政府の立場にたって考え、問題を発展させているので、史実の奥にひそむ複雑な関連的思考をも深めることができた。

(2) 資料を細かく分析し、豊富に与えることによって因果関係の思考が深められる。

教科書の記述で非常に重要な意味を含んでいるところを具体的な資料におきかえ、細かく分析して与えたことを、資料のたいせつなところに線を引かせ、考えるための条件として何をひき出せばよいかをはっきりさせたことはよかった。こうした作業をとおすことによって、子どもは史実を分類したり、総合したりして関連の思考が深められていく。

(3) 相対立する思考活動の発展によって因果関係の思考は深められる。

T<sub>5</sub>の発問によって、子どもは学習を生き生きと発展させ、小集団の思考活動が積極的になり、全体への発表によって相対立する意見が明瞭になり、議論をとおしてだんだんと考えが深められていった。資料を具体的に解釈したC<sub>10</sub> C<sub>11</sub>の発言や、資料から高次の抽象をみちびきだしたC<sub>12</sub> C<sub>13</sub>の発言は、自由民権運動の全盛期を洞察した、するどい発言と言っていいと思う。

## むすび

歴史学習の中では、特に因果関係を把握させるために、どのように考えさせればいいのかを実践的な研究によって追求してきた。因果関係の思考にもいくつかのタイプがあること、授業過程のなかで、因果関係の思考を深めるにも、いくつかの指導の条件があることを検討した。

今後、この指導の条件と、思考傾向の型との関連を追求していきたい。